

夢をあきらめない

たかはし
高梁市長(岡山県) **近藤隆則**
Takanori Kondo



はじめに

己亥つちのといの年を迎えました。輝かしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。今年、自分にとって60年ぶりの己亥の年となりました。そうです。還暦です。自分の気持ちとしてはそんな歳とは思えないのですが、松浦前市長会長が話されていたことを振り返り、健康維持に改めて努めようと思っています。

自転車レースクラス優勝

高梁市では、平成23年からアップヒルの自転車レース『ヒルクライムチャレンジシリーズ 高梁吹屋ふるさと村大会』を開催



沿道の声援を受けながら愛車で走る筆者

しています。この大会は、県や警察、地元の方々の協力なくしては成し得ない大会です。私は大会会長をさせていただくほか、レースにも参加しています。

コースは、主要地方道高梁坂本線の15kmを使って行われます。平均斜度は2・6%とアップヒルのコースとしては易しい部類で、第1回大会の参加者数350人を皮切りに、年々参加者が増加し、昨年は千人に迫るほどの大きな大会となりました。

では、なぜこんなに参加者が増加しているのか？ それは、他のヒルクライムレースにはない、コース全体での『おもてなし』が、選手の皆さんに受け入れられているからだと思います。

市街地にあるメイン会場をスタートし、競技のスタート地点までは12kmのパレードランがあります。パレードランは競技ではありませんが、その沿道では、市民の皆さんがこぞって旗を振って応援してくれまます。また、沿道で声援を送る市民の皆さんの「がんばれよ！」の声に、選手の皆さんも「ありがとう！」とうなずいて応えています。そしてスタート地点からゴールまでの競技区間でも、田舎の道路を走ることもあり各所で応援の旗が振られ、声援が送られます。ゴールは重伝建地区である吹屋ふるさと村です。ゴール前の最後の坂は一番きついです。沿道から大勢の方が応援をしてくださり、最後の力を振り絞ることがで



岡山後楽園で演舞する筆者(中央)

きます。私のタイムは、50歳代のクラスで最低の57分台です。来年からは60歳台のクラスでの勝負となります。ぜひ、来年以降もレースに参加したいと考えています。そして、来年の大会では、60歳代クラスでの優勝を目指し、今から健康づくりも兼ねて、日々愛車を走らせようと思っています。

守りたい郷土の伝統

全国各地には、昔からその地域に伝わる伝統行事や風習があると思います。わが高梁市では、その昔、凶作などの神の怒りを鎮める祭礼の余興として神楽が奉納されていました。このころ、古事記や日本書紀の

神話をもとに、地元・成羽の神官であった「西林國橋」が神話劇を創案、旧来の神樂の中に挿入し、盛大に舞を舞ったとされています。これが備中神樂の始まりです。今では、国指定の重要無形民俗文化財として、多くの社中により舞われています。そしてこれを受け継ぐため、小学生はもとより、中学生や高校生も参加する育成会活動が盛んになっています。

もう一つ、本市には「渡り拍子」という伝統芸能があります。地域ごとにその伝承活動が行われていますが、私の地元にも伝わる渡り拍子については、後継者の減少により、一時期その継承が途絶えていました。そこで、平成4年に当時の保護者とその子



門司港駅にて鉄ちゃん仲間と筆者（左から2人目）



在来線最後のあさま号の切符

どもたちで保存会を結成し、伝承活動を始めました。以前舞っていたという地元のお年寄りを講師に迎え、練習を開始し、太鼓の調達や小道具の作製など、みんなで手作りで伝統を守ろうと頑張りました。地元でのイベントへ出演するなどしてきました。子どもたちの数の減少とともに活動の維持が難しくなりつつあります。でも、ここまですなげた伝統をここで消すわけにはいきません。私もできるだけ参加をし、多くの方に良さや大切さを伝えていきたいと思っています。

鉄ちゃん

私は、根っからの鉄道ファンです。いわゆる鉄ちゃんの中にもいろいろなジャンルがあり、私は「乗り鉄」であり、時刻表オタクでもあります。鉄道に興味を持ち始めたのは幼稚園の時からで、電車のおもちゃを買ってもらった

のがきっかけです。その当時、ちょうど東海道新幹線が開通しました。0系と呼ばれる最初の新幹線車両にあこ

がれ、当然のように新幹線の運転士になることを夢見て、中学・高校へと進みました。さらに、当時の国鉄に入社して運転士になるためには、電気科を卒業する必要があります。ため、大学では電気工学科に進みました。人生の転機は大学卒業の時です。国鉄の合格をいただきながら、家庭の都合で市役所も受験し、最終的に選んだのは市役所に奉職することでした。この時点で、私が新幹線の運転士になることはなくなりました。小さいころからの夢を、手の届くところまでできていた夢を、やむを得ず手放してしまったのです。

残念ながら、実際の運転士にはなれませんでした。鉄道が好きだという想いは変わらず持ち続けていたので、就職後は仲間とともに、鉄道旅行などを楽しんでいきます。自分が所属部署の旅行幹事にでもなれば、事前に下調べをし、とにかくみんなが楽しめるよう企画しました。上野発の夜行列車に乗り、青森駅で降りたときは雪の中だった。という、どこかの歌詞に出てくるような旅行も経験しました。

今は、出張で鉄道に乗る時間が、私にとって至福の時です。でも、やはり運転士の夢があきらめきれない自分が今もいます。無理なのは分かっていますが、この先もしもチャンスがあれば、何らかの鉄道にかかわる仕事ができたらと思っています。夢はこれからも持ち続けたいものです。